

## このひと

日本分析化学会会長に就任される

岡田 哲 男 氏

(Tetsuo OKADA  
東京工業大学大学院理学院化学系教授)

1981年京都大学理学部卒業。1986年京都大学大学院理学研究科博士課程修了。1986年静岡大学教養部助手。1989年同助教授。1995年東京工業大学理学部助教授(1998年改組により同大学院理工学研究科助教授)。2000年同教授。2015年4月から同大学院理工学研究科理学系長、理学部長。2016年4月から組織改革により理学院長。1988年 Texas Tech University 博士研究員。1997年 International Ion Chromatography Award, 2013年日本イオン交換学会学会賞, 2015年日本分析化学会学会賞。2003/2004年 Anal.Sci. 編集理事, 2013年関東支部長, 2015/2016年日本分析化学会副会長。

このたびの日本分析化学会会長にご就任される東工大の岡田哲男先生をお祝いする気持ちで、私から見た先生をご紹介申し上げる。私は岡田先生の研究室で約5年間、准教授として非常に価値ある時期を過ごした。そもそも分離科学を専門とする岡田先生と、界面の振動分光を専門とする私が同じ研究室で過ごすことになるとは、まったく予想せぬことであった。異分野の私を分析化学教育の幅を重視してご採用くださったこと自体、日ごろからバラバラで広い視野を求め、かつ独立した研究者であり続けたいという先生の思想が端的に現れているように思う。

岡田先生は徹底して“基礎に忠実”で、誰をも頼ることなくご自身でアイデアを出し続けている。そして緻密な論理をもとに強力に学生を指導する研究姿勢を貫いているところが印象的で、私の重要な手本のひとつとなった。流行ばかりを追わなければ生きていけないことが半ば当たり前となった昨今の典型的な研究者とは大いに一線を画するもので、京大理学の理想主義の強い研究者としての意志が伝わり、大いに共感した。

岡田先生の分離科学に関するご研究は、イオンクロマトグラフィーに始まり、氷を固定相とするアイスクロマトグラフィー、流れの場を利用した field flow fractionation (FFF)、それに粒子の音響物性の違いを利用した超音波照射による粒子分離の四つが代表的で、とくに後半三つのテーマはいずれも研究者人口が少ない挑戦的な未開拓分野で、そのすべてで基礎学理構築に奮闘されている。とりわけアイスクロマトグラフィーは、実験技術の確立から氷のバルクおよび表面物性そのものの理解の深



化、さらにキラル化合物分離への応用展開など、完全に岡田先生の独壇場といえる分野の開拓に成功され、現在も世界のトップを走っておられる。いずれのテーマも、溶液が研究対象と言えるため、明らかに乾きものを得意とする私とは大きく方向性が異なり、研究室での雑誌会等での議論は当初なかなか難しく感じられた。しかし繰り返し聞いているうちに、感覚的に浸み込んでくるものがあり、水溶液中での特にイオンの水和に関する描像を根本的に改めることができたことは、私の化学の理解に大きな影響を与えてくれ、非常に感謝している。

学会等の社会活動では、面倒な雑務を効率的にこなしてクールな表情を崩さない点が素晴らしく、私には絶対真似ができない。また、抜群の記憶力に支えられた広い視野に立つての発言力も岡田先生の傑出した一面である。生物化学を除くほとんどすべての分野に広範な知識をお持ちで、記憶の引出しの速さは圧倒的である。これは数多くのクイズテレビ番組で優秀な成績をたたき出した実績にも裏打ちされており、岡田先生を語る上で外せない客観的な事実である。

つまり、岡田先生は高尚なアカデミアはもちろん、世間一般の幅広い話題にまで柔軟に受け入れ、その独特な軽やかさで人を魅了できる稀有な人物である。和歌山市生まれの根っからの関西人で、鋭いつっこみの達人でありながら、想定外のボケ役もこなされるなど魅力が尽きない。

こうした多彩なお力を背景に、多くの人に受け入れられる方向性をたちどころに打ち出せるすっきりとした判断力でも秀でておられ、このたびの日本分析化学会会長のご就任に、心からの期待を感じている。

〔京都大学化学研究所 長谷川 健〕

## 会長就任にあたって

岡田 哲男

この度、2017～2018年度の日本分析化学会の会長に選出されました。会員の皆様、理事会構成員および事務局の皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

申し上げるまでもありませんが、分析化学は、研究・教育分野として化学の根幹をなしており、また産業を生み、支える重要な役割を担っています。日本分析化学会は、産官学の広い分野における科学・技術の共通基盤としての、また人類が継承すべき文化としての分析化学を発展させることで人類の福祉に寄与することを目的としています。分析化学への社会からの付託や期待は決して縮小していませんが、残念ながら本学会の会員数は、ここ数年間毎年5%程度の割合で減り続けています。これが学会の財政を圧迫している原因の一つであることは間違いありません。会員減少や財政の悪化は本学会だけの問題ではなく、他の学会でも同様です。しかし、同病相憐れむだけでは問題の解決にはなりません。従来の会員の皆様に満足いただける学術活動を維持しつつ、新たな枠組みを広げていくことが必要です。そのためには、分析化学の間口の広さ、懐の深さを生かせるのではないかと考えています。

年会や討論会での研究発表分野ごとの発表件数の増減や会場ごとの出席者数は、分析化学会会員の研究や興味の様子を知る上で有用な指標です。過去十数年の年会レポートを調べてみると、原子スペクトル分析、電気化学分析などは一定数の発表、来場者数を維持しています。また、環境分析、バイオ分析、微粒子・界面などの分野で多くの発表が見られます。特に、広い意味での環境とバイオ分析は、他の発表分類に比べて件数が特に多いことから、当該分野の主要な流れの一部を本学会が担っていると言えそうです。一方で、最近急速に発表件数が少なくなっている分野もあります。このような分野では、研究動向等の変化に本学会が対応できていない可能性があります。また、他国では分析化学の一部と見なされている質量分析や磁気共鳴などの発表が少ないことも気になります。このように見ていくと、本学会が関連分野の学術研究の動向と産業界のニーズを完全には受け止められていない、特に弱い分野が存在することがわかります。昨年度、丹羽前副会長を中心に、理事会等で発表分類の改善を議論し、方法論以外の分類法を増やすことを検討してきましたので、この点が少し変わるかと思えます。また、シンポジウムなど種々の機会を通じて新たな層を積

極的に本会に引き込むことも必要です。

将来学会を背負っていく世代の育成も重要な課題です。日本の大学では博士課程進学者が少なくなっており、若手研究者の不安定な雇用がその一因として指摘されています。分析化学で学位を取って、産官学あらゆる方向に人材を輩出するのが理想ですが、容易ではありません。産業界の会員の割合が高い日本分析化学会の特長を生かして、知恵を出し合っていきたいと思えます。また、トランプ政権の誕生で少なくとも2～3年の間、留学生や外国人若手研究者がこれまでとは異なる動きをすると考えられます。国際的なイベントを通じて、優秀な留学生や研究者を日本の分析化学に誘導するチャンスだと思えます。

学会財政における一つの負の要因が上述の会員の減少です。他にも慣性（惰性）による非効率な運営や体質など改善すべき点が多々あります。現在、会費収入のほとんどが人件費などの労務費に消えてしまい、学会活動として目に見える部分はその他の収入で賄っています。今のままでは早晩学会の経営が行き詰まります。効率的にまた機動的に学会運営を行うには、学会本部で行うべき業務とアウトソーシングすべき業務を適切に仕分ける必要があります。業務態勢の改革には事務局の皆さんの協力が欠かせません。会員の皆様が会費を払い、参加費を払って学会に出席するのは、学術発表・議論の場、交流の場として、学会の存在に意義を感じているからです。このような場としての学会が健全であること、仕事や勉学に役立ち、知的好奇心を刺激すること、そしてなにより楽しいことが会員を満足させ、学会活動の拡大につながります。

私が日本分析化学会に入会したのは約35年前、修士課程の1年生の時でした。それ以来、本会を主な研究活動の場として利用するとともに、学会での活動を通じて多くの方から叱咤激励され、救われたことも少なからずありました。これまで会長を務められた先生方は著名な方ばかりで、私とその末席を汚すことになろうとは思っておりませんでした。諸先生方の見識にはとても及びませんが、上述の観点から私にできることをしようと思っております。それによって日本分析化学会に少しでも恩返しができるれば幸いです。会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。